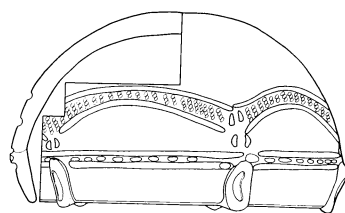
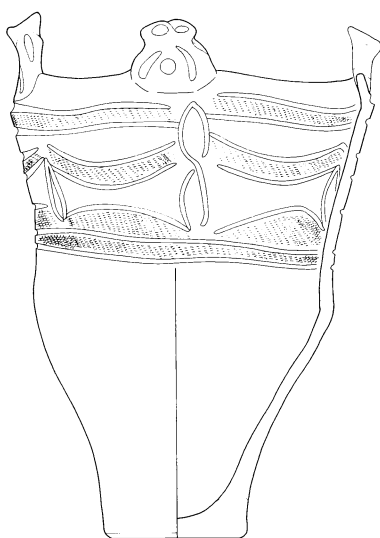


資料室だより Vol.3

No. 16 1988.1

大磯町立図書館
郷土資料研究室

大磯町大磯992番地
TEL. 0463-61-3002



石神台遺跡出土縄文土器実測図(左:深鉢形土器 右:碗形土器)

訂正

表紙実測図

右、碗形土器の天地が逆

遺跡は語る ～石神台遺跡～

鈴木 一 男

石神台遺跡は、大磯町の中心部より西へ約4km離れた石神台に存在し、大磯丘陵の南端海拔約80mの第四紀の段丘上に立地しています。この一帯は、大規模な開発により従来の景観とは全く懸離れたものとなってしまいましたが、僅かに遺跡のある台地だけが昔の面影を残しています。

昭和47年(1972)、東海大学によりはじめて発掘調査が行われ、配石遺構と呼ばれる特殊な遺構が検出されました。最も興味ある事実は、その石の下に穴(長方形・長楕円形)

が掘られていて、そこから人骨が出土したことでした。

東名高速道路の大井・松田I・Cの脇に一際目立つ建物があります。この建物がある台地も遺跡で、金子台遺跡と呼ばれています。実は、この発掘調査でも石神台遺跡と同じような成果がありました。金子台遺跡では、人骨の出土はなく、歯だけが発見されました。

従来、配石遺構は祭祀に関連するものと言われてきましたが、徐々に墓地ではないかとも考えられるようになったわけです。

このように、配石遺構は墓地説と祭祀説の2説がほぼ互角に存在したままでしたので、

石神台遺跡の成果は、配石遺構＝墓地説を有力にさせる、極めてセンセーショナルな出来事でもあったわけです。

さて、東海大学の調査から13年目の昭和60年（1985）この地に宅地造成の話があって、私たちはその事前発掘調査に携わり、多くの成果を得ることができました。そして、図らずも2年後の昭和62年（1987）にも再びこの遺跡を発掘調査する機会に恵まれました。

ただ、発掘調査を行うと言うことは、ある意味では遺跡を破壊することにつながるわけで、石神台遺跡も都合3度の発掘調査によって、約7割は消滅してしまいました。ですから、私たちは調査中、充分な注意を払い、作業を進めて、発掘終了後はその成果に学術的肉付をし、遺跡の完全な記録を残すために1冊の報告書として後世に伝える作業を行って

いるわけです。

以下、最近の2度の発掘調査で得られた事実をもとに話を進めていきたいと思います。

現在残っている台地は、南北約500m、東西約350mで、平面形は「裸電球を逆転」させたような形をしています。北側部分は配水池があり、遺跡の半分はこれにより既に破壊されています。過去3度の調査は南側半分に集中しているわけです。

まず、調査の成果は第1図に示すとおりで、縄文時代に限って列挙すれば、次のようです。

① ごみ捨て場……………1ヶ所

台地南側で発見。現在、発見場所から南側はすぐ崖になっていますが、以前はなだらかな傾斜で下方に続いていました。不正形をしたかなり大形の遺構で、中には2000点を越す土器片と300点近い獣骨片（鑑定中ですが、イノシシとシカがほとんどとのこと）、石鏃（ヤジリ）の材料である黒曜石などがあ

りました。この調査だけでも2週間以上かかってしまいました。

② 土塚・土塚墓……………27ヶ所

一般的に人為的に掘られた穴を土塚と呼びますが、外観や形状などから、「落し穴」・「貯蔵穴」・「墓穴」に分けられます。土塚墓はまさしく「墓」で、10基発見され、皆台地西側に集中していました。その他の土塚はいずれの種類にも属さず、性格は不明ですが台地中央部に散在していました。

③ 配石……………12ヶ所

拳大～頭大まで大小様々の礫が不規則に配置されている遺構で、この石を取り除くと土塚墓が出現します。西側では調査した面のほとんどが礫で覆われていました。

④ ピット群……………1ヶ所

台地西側、配石南側で発見。総計106個あり、大きさや深さなどもバラエティーに富んでいます。ピットも通称「穴」をさしますが「柱穴」や「小さな穴」をさす場合が多く見られます。石神台遺跡のピット群は、複数の住居址と考えられます。

以上のように、石神台遺跡では、住居・墓地・ごみ捨て場と各々の空間がきちんと配置されていることがわかります。もっと具体的に言えば、住居と墓地はかなり近い位置にあり、ごみ捨て場は住居から墓地を通ることなく、離れた位置に作られていることがわかります。使えなくなった土器や食べ残した物はその都度、ここへ投棄されたのでしょうか。

生活の拠点は、もちろんこの台地ですが、日々の生活のため、台地北方の山々で狩猟や木の実の採取をしたことは容易に想像できますし、欠くことのできない飲料水は、台地西側下方（昔は小川が流れていた）で得ていたと考えられます。更に、この水場には当然湿

地帯があったと想定され、そこに自生する植物や集まる小動物もきっと石神台縄文人の腹に入ったと思われます。そして、西側崖面には、大小無数の礫があって、台地上の配石はここから1個1個運んだと考えられ、大きな石は墓標となったのではないのでしょうか。

標高80mのこの台地をなぜ縄文人達は選んだのでしょうか。同じ時期、大磯小学校や城山にも縄文人達は住んでいますが、両遺跡とも標高は14~15mです。馬場の台地でも破片が発見されていますが、それでも標高20mです。ですから、石神台遺跡は数値的に見ても例外と言わざるを得ません。

どうして、こんなに高い所に住まなければならなかったのでしょうか。彼らを取り巻く様々な環境が、この台地ならすべてクリアできたと考えるべきかも知れません。

両遺跡が積極的に海に進出して行ったのに比べ、石神台縄文人は、どちらかと言うと「山」に重点を置いたように思われます。何となく暗い閉鎖的なイメージを相像してしまいそうですが、石神台は位置的に見て、当時に限っては交通の拠点だったのではないでしょ

うか。黒曜石の量も他の2遺跡より多いし、土器も東海系や東北系のもの（本物と似せて作ったものがあります）が見られる点からも石神台縄文人は、標高80mの台地上で孤立無援で生活していたのではなく、積極的に外部と接触していたと考えた方が妥当ではないでしょうか。もっと想像すれば、婚姻も近くでなく、遠くと結んだのかも知れません。

1つの遺跡が語ってくれる歴史、それはとりもおさず1つの遺構、1つの土器片が語ってくれる「生の歴史」です。石神台遺跡は縄文時代の墓を知る上で極めて貴重な遺跡で学史に残る遺跡でもあります。

苦勞してこの台地に着いて死んだ人、ここで生まれ、育ち、死んだ人あるいは不慮の事故で死んだ人、彼らは死んでもなお、子や孫の住む家の側で、彼らを見守りながら眠っていたわけです。私たちは、発掘調査によって、それを明らかにすることができたわけですが、できれば発掘調査をしないで、そのまま永遠にそっとしておいてやりたかったと今でも思っているのです。

（社会教育課・学芸員）

